第７回基地跡地の未来に関する懇談会　議事要旨

日　時：令和２年４月１０日　１０：００～１０：４０

場　所：ウェブ会議による開催

出席者：懇談会委員

（座長）角南　　篤　　公益財団法人笹川平和財団海洋政策研究所所長
大﨑　　洋　　吉本興業ホールディングス株式会社代表取締役会長
塩浦　政也　　建築家　株式会社 SCAPE 代表取締役
玉城　絵美　　早稲田大学准教授
中村　彰二朗　　アクセンチュア株式会社
アクセンチュア・イノベーションセンター福島センター長

：内閣府
別府内閣府審議官、宮地政策統括官（沖縄政策担当）、水野大臣官房審議官、芋坂参事官（政策調整担当）、中原企画官（政策調整担当）

【議事次第】

１　開　会
２　議　事
核となる施設・機能のありうるオプションについて
・中間取りまとめ（案）について
３　閉　会

【配付資料】

資料１　　中間取りまとめ（案）（概要）（委員限り）
資料２　　中間取りまとめ（案）　　（委員限り）
参考資料　跡地振興の中核となる施設・機能のイメージ

【議事要旨】

事務局から中間取りまとめ（素案）以降の修正経緯（中間取りまとめ（素案）に対する第 5 回及び第 6 回懇談会での意見を反映した修正版について各委員から修正意見をいただき、中間取りまとめ（案）を作成）を説明した。

この経緯を踏まえつつ、座長が委員に中間取りまとめ（案）に対する意見を求めた。

○「都市」という名称を用いているが、ポスト・コロナのあり方を考えると、人が集まって街をつくる、都市化するというのが良いのか気になっている。デジタル共同体・デジタルユイマールなど、都市化のイメージとは異なる言い方が良いのではないか。

○これまでの懇談会の議論を踏まえると、ここでの「都市」化というものは、「分散」のイメージを大前提としてきたと思う。テレワークも含んだ議論をしてきた。その点を（「中間取りまとめ」を読んだ人から）誤解されないようにしなければならない。アフターコロナに関しては、ニューノーマルという言葉で（新しいあり方の）イメージを伝えている。確かに、今の状況下で都市化と聞くと、過密な街をイメージされかねないので、ニューノーマルのイメージに触れられると良い。

○都市という言葉から誤解を受けないようにする必要がある。都市というものが、単に（過去を）破壊して新しく再構築していくものではなく、沖縄の自然や文化として過去と現在と未来が共生していくための「都市」であるということを示せると良い。

以上の意見を踏まえ、座長から、中間取りまとめ（案）においては、これまでの議論を踏まえ「都市」とかぎ括弧付きで表記され、従来の都市とは異なるものであることを明らかにしていることから、文書の修正は不要とすること、ただし、座長がブリーフィングで内容を説明する際には、かぎ括弧が付いていることについて、アフターコロナの観点も含めて、自然等と共存していく新しい考えに基づいたまちづくりやコミュニティづくりを意味しているためである旨を説明すること、また、ホームページに掲載・公表する「中間取りまとめ」に後で注釈を追記する方向で事務局と相談すること、との方針が説明され、各委員から了承があった。

また、座長から「中間取りまとめ」について、名称を「第一次取りまとめ」としたいとの提案があった。今回示すオプションについて地元で議論される際に、「中間」という名称では、これまで懇談会で議論したオプション自体がまだ中途半端なもので今後大きく変わるものとのニュアンスで捉えられかねないという懸念があり、一定レベルの完成度を持っていることを示すため、また、懇談会としては、今回の取りまとめを踏まえた地元の議論を今後しっかりフォローした上で、今後の懇談会の進め方を検討することを想定しており、「中間」という名称とすることで地元の検討を急がせすぎてしまわないためであるとの説明があった。これに対して、各委員からは異議がなく、「第一次取りまとめ」が確定した。

次に、「第一次取りまとめ」の内容において各委員が強調したい点について改めて各委員の発言を求めた。

○これまで東日本大震災・地方創生等のタイミングも含めて長い間、一極集中からの機能分散を進める流れがあったが、なかなか成就してこなかった。新型コロナウイルスを全国、全世界で経験した今のタイミングだからこそ、今回の取りまとめが、新しい日常や、新しい日本を創る流れに繋がれば良いと思う。

○取りまとめの最後にある「現時点から始められる施設・機能づくりに今から着手する」というところを強調したい。議論等は継続して行っていくが、やれることからやりましょうというメッセージである。

○大都市周辺でテクノロジーの研究開発がなされ、大都市のスタートアップや大企業がテクノロジーを牽引していくという世の中だけでは済まなくなってきている。それではテクノロジーが発展していかなくなってきている。地元が主体的にテクノロジーを牽引する世の中にしなければならない。シリコン・リーフという名称が示すように、小さなサンゴ礁の島であっても大都市に負けずに主体的にテクノロジーを牽引していくエコシステムを実現したい。

　また、単にテクノロジーの研究開発をしていくだけではなく、インベスター（投資家）を含む金融や、文化を含むテクノロジーの発展に主眼を置くことで、基地跡地の利用の恩恵が周辺地域へも回っていくような、地方の理想都市になっていただきたいと考えている。

○都市やまちづくりの観点から、「ワーケーション等の新たな働き方の実践」が求められていることを強調したい。施設を新しくすることではなく、働き方自体の考え方や行動の変容が求められている。（昨今の状況で注目されているが）懇談会では去年の夏ぐらいから議論してきたことである。

　また、「沖縄を象徴する景観」に関して、これまでのように（都市を）更地に戻して一から造るというスクラップ・アンド・ビルドの考え方ではなく、基地（があったこと）も含めての歴史など、沖縄らしさを、なるべく残していくというリノベーションのような考え方を取り入れ、まちづくりをしていくべきである。

　最後に座長から、「第一次取りまとめ」を出して終わりではなく、各委員と一緒に沖縄の明るい未来を見据えて今後もしっかりフォローしていきたい、また、各委員にも今後とも御協力いただきたいとの総括の言葉があり、閉会した。